

エジプト中王国時代の葬送における 装身具のカテゴリとその役割について

山崎 世理愛

Functional Aspects of Egyptian Middle Kingdom Accessories in Funerary Contexts

Seria YAMAZAKI

副葬される装身具には、死者を飾る以上の役割が与えられていた。本稿では、中王国時代の葬送における装身具のカテゴリを復元し、それぞれが担った役割の一端を明らかにする。まず、装身具の組成と配置に見られる規則性を分析した結果、特定の装身具が被葬者により近い位置に副葬される傾向が看取された。そして、これらは複数の葬送儀礼と密接に関わるものであることが分かった。一方、その他装身具は、被葬者の性別や王との繋がりなどを反映しており、被葬者から距離のある位置に副葬される傾向にあった。当該期には、特定の装身具によって葬送儀礼を再現し永続化させるとともに、その他装身具を用いてアイデンティティを示すことも重要視されていたと考えられる。

キーワード：古代エジプト、中王国時代、装身具、副葬位置、葬送儀礼

In ancient Egypt, the deceased were often buried with several accessories, the functions of which remain unclear. This paper aims to clarify the role of accessories in funerary contexts by reconstructing their categorization from an emic perspective and further comparison with iconography and texts. Analysis of the assemblage and location in the tomb revealed that specific accessories such as broad collars, broad bracelets and anklets, *hs*-shaped amulets, *swrt* beads, *ḏrtt* beads, beaded aprons, tails, and swallow-shaped amulets were placed close to the deceased. *Frise d'objets* suggested that they were deeply related to several object rituals. These accessories functioned beyond mere ornamentation; it appears that they were utilized to represent several funerary rituals and perpetuate them. On the other hand, many other accessories indicating the identity of the deceased, gender and familiarity with the king, were discovered further away from the deceased, suggesting that they belong to a different category than the accessories mentioned above.

Key-words: Ancient Egypt, Middle Kingdom, accessory, position in the tomb, funerary ritual

1. はじめに

古代エジプトの装身具は、墓から最も頻繁に出土する副葬品の一つである。特に中王国時代の装身具は、より精巧且つその形態とデザインが多様化するとされている (Hayes 1953: 231)。これまで古代エジプトの装身具研究は、主にビーズや護符を対象に進められてきた (e.g. Petrie 1914; Andrews 1994; Dubiel 2008; Xia 2014)。とりわけ護符については、個別研究が盛んにおこなわれ、それぞれ呪術的な意味合いなどが論じられている。一方、装身具自体の研究例は少ないものの、副葬された装身具の種類や時期的変遷などが明らかにされている。しかしながら、死者の装身に込められた意味については十分に議論されていない。つまり、多種多様な装身具が墓から出土している中

で、それらが各々どのように認識され副葬されたのかについては不明瞭なのである。

そこで本稿では、まず副葬時の装身具の組み合わせと配置に見られる規則性の分析を軸に、中王国時代の装身具カテゴリを復元する。そして、特定の装身具と葬送儀礼との関連性を検討することで、それらの副葬にはどのような意図があったのかを考える。以上を踏まえ、最後に中王国時代の葬送における各カテゴリの装身具に与えられた役割の一端を明らかにしたい。

2. 中王国時代の装身具研究の現状

エジプトで発掘される墓の多くは、盗掘で攪乱されており、当時の様子を残している例は少ない。しかし、そう

いった資料的な制限を抱えながらも、装身具を含む副葬品選択の中に特定のパターンを見いだすことができれば、埋葬習慣をより具体的に解明する上で大きな役割を担うこととなる。中王国時代の埋葬習慣研究の代表的な例として、個別の遺物研究を横断的に用い、埋葬習慣が複数段階を経て変化していくことを明らかにしたJ. ボリオ (Bourriau) の論考が挙げられる (Bourriau 1991)。さらに、J.-L. ポドゥヴァン (Podvin) は、副葬品の組成と配置に着目して分析をおこない、副葬品の配置には特定の傾向があることを明らかにした (Podvin 2000)。両者の研究は、いずれも全体的な傾向を読み解くことに成功している。ただし、その目的のために、各遺物の詳細な分析にはあまり注意が向けられていない。特に装身具に関しては、ほとんど関心が寄せられてこなかった。たとえば、ポドゥヴァンは分析において装身具を「装身具・護符」という名称で一括りに扱ったのみで、種類や組み合わせ、それらの配置関係については十分に検討していない (Podvin 2000: 286-287)。副葬品全般を扱った研究の中において、装身具は重要視されてこなかったのである。

また、特定の副葬品を対象とした研究においても、装身具が研究の俎上に載せられることは少なかった。装身具研究が盛んにおこなわれな一因として、遺物の遺存状況が挙げられる。古代エジプトの装身具は主にビーズで構成されており、多くの場合出土時にはすでに紐からビーズが抜け落ちてしまっているのである。少数ながらおこなわれてきた装身具自体の研究は、主に出土時期・遺跡を問わず全般的に扱ったものであり、装身具の種類や全体的な利用の様相を理解するには有用であっても、それ以上の分析結果は得られていない (e.g. Aldred 1971; Wilkinson 1971; Andrews 1990)。その中で、W. C. ヘイズ (Hayes) は、古代エジプトの物質文化についてまとめた書籍において、装身具に関する重要な指摘をしている (Hayes 1953: 228-240, 306-309)。それは、第11・12王朝時代の墓で発見される装身具は、「個人用装身具 (personal jewelry)」と「葬送用装身具 (funerary jewelry)」の大きく2つに分けられるというものである (Hayes 1953: 228)。葬送用装身具は、副葬するためだけに製作されたもので、その典型的なセットは、襟飾り (broad collar) と幅広腕輪・足輪であるということも述べている (Hayes 1953: 228, 306)。ただ、ヘイズの関心は専らその装身具が生前身に着けられていたか否かという点にあった。また、近年では、W. グライエツキー (Grajetzki) によって中王国時代後期の女性の埋葬に関する書籍が出版され、その中では装身具が重要な副葬品として多く言及されている (Grajetzki 2014)。彼は、装身具の出土コンテキストや被葬者の社会的地位に注目し、装身具選択について考察した。そして、主要な葬送

用装身具は、襟飾り、ロイヤルエプロン、腕輪、足輪であり、社会的地位の高い被葬者がそれらを頻繁に装着していたという結果を提示した (Grajetzki 2014: 131)。しかし、両者は副葬位置に関しては断片的に言及するに過ぎず、丹念に検討しているとは言えない。また、個人用・葬送用という分類自体は説得力があるものの、個々の装身具の象徴的な意味合いは十分に考慮されておらず、当時の認識や概念的なカテゴリを捉えきれていない。コンテキストを重視した分析をおこなうことで、意味や役割といった当時の装身具に対する認識が一層鮮明になると考えられる。

3. 本稿の目的と分析方法

本稿では、装身具の組み合わせと副葬位置に見られる規則性の検討から、中王国時代の葬送における装身具のカテゴリを復元し、各カテゴリの装身具が担った役割の一端を明らかにすることを目的とする。

各墓のコンテキストを重視するために、装身具が出土した墓の中でも未盗掘あるいは比較的残存状況が良好な墓のみを分析の対象とする。具体的には、まず対象墓から出土した装身具を整理し、組み合わせや副葬位置に見られる傾向を分析する。そして、それを踏まえ、木棺やその他の遺物に描かれた画像資料と比較することで、中王国時代における装身具カテゴリを復元する。また、特定の装身具と葬送儀礼との関連について、画像・文字資料をもとに考える。最後に、葬送においてどのような意図のもとに様々な装身具が副葬されたのかを各カテゴリの装身具に与えられた役割の違いから考察する。

4. 墓から出土した装身具の組成・配置分析

本章では、未盗掘墓や出土状況が詳細に記録された例を中心に、装身具の組み合わせと副葬位置に関する分析をおこなう。

4-1. 王族以外の墓から出土した装身具の分析

まず、王族以外の例は計18例あり、多くがメンフィス・ファイユーム地域と南部エジプト (図1) に位置する墓である。墓の年代については、中王国時代前期から後期までを含む。

a) 組み合わせ

表1に示した対象墓出土の装身具の中で、共通の組み合わせが見られた例として、サッカラ (Saqqara) のテティピラミッド墓地遺跡 (Teti Pyramid Cemeteries) HMK 26, Coffin B, HMK 30 (図2)、HMK 69, Burial 118、テーベ (Thebes) のウアフ (Wah) 墓 (図3)、リシェト (Lisht) 遺跡のセネブティシ (Senebtisi) 墓 (図4) を挙げたい。

これらの墓では、襟飾りと幅広腕輪・足輪がセットで副葬されていた。ヘイズやグライエツキーが指摘しているように、これらは典型的な装身具のセットであったと考えられる (Hayes 1953: 228, 306; Grajetzki 2014: 131)。ただし、副葬点数に規則性は見受けられなかった。複数の襟飾りが副葬される場合には、異なる種類が選択される傾向にあり、テティピラミッド墓地遺跡の HMK 26, Coffin B ではビーズ製襟飾りとおそらく木に金箔が施されたもの、そしてセネブティシ墓では、2種類のビーズ製襟飾り (図4 [6] [7]) と金箔が施された金属製襟飾り (図4 [8]) が使われていた。幅広腕輪・足輪は、テティピラミッド墓地遺跡とウアフ墓から出土した小型のものと (図2 [2], 3 [3])、セネブティシ墓で見つかった幅がより広いもの (図4 [12] [13]) の2種類が確認された。

本稿では、襟飾りと幅広腕輪・足輪という典型的なセットと共に使われたその他一部の装身具についても、共通のパターンが見られるものが抽出された。まず、ヘス壺形護符がテティピラミッド墓地遺跡 HMK 26, Coffin B、HMK 30、HMK 69 から出土している (e.g. 図2 [6])。そして、セネブティシ墓からは、同じくヘス壺形を呈した複数の護符が首飾りとして用いられていたのである (図4 [5])。さらに、メンフィス・ファイユーム地域のテティピラミッド墓地遺跡 HMK 26, Coffin B、HMK 30 とセネブティシ墓、南部エジプトのウアフ墓からは、共通して紅玉髓製樽形ビーズが出土している。これらは図3 [1] のように、一点の紅玉髓製樽形ビーズが亜麻糸などに通された状態で見つかったことから、他のビーズ製装身具から抜け落ちたとは考えづらい。一点の紅玉髓製樽形ビーズの

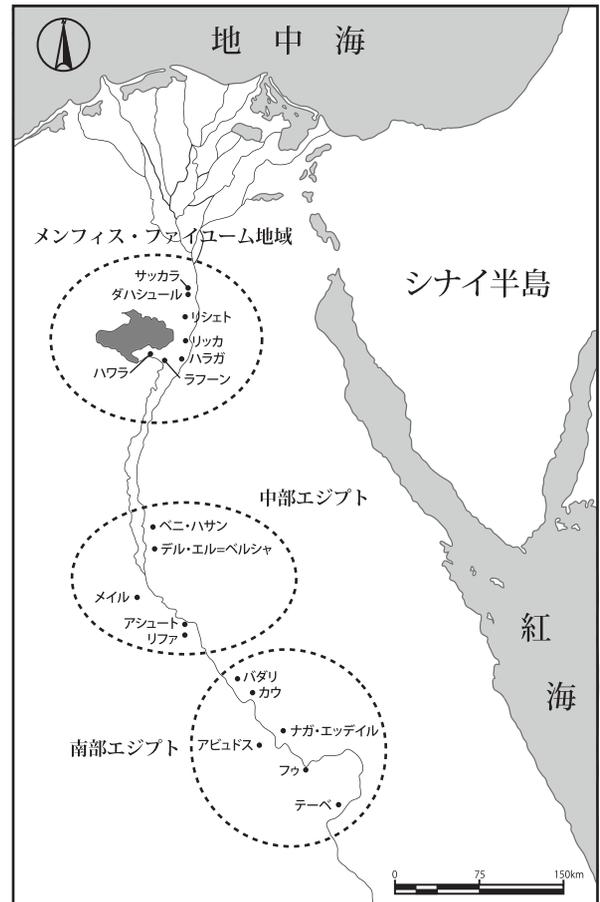


図1 中王国時代の主要な遺跡を示したエジプト地図

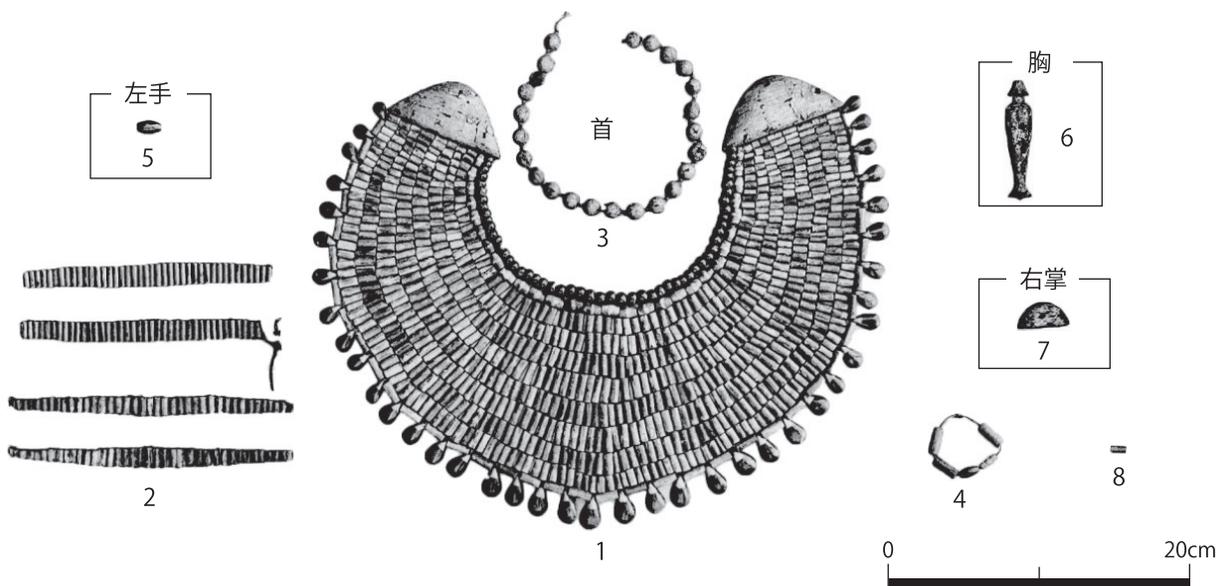


図2 サッカラ、テティピラミッド墓地遺跡 HMK30 (ゲムニエムハト墓) 出土装身具 (Firth and Gunn 1926: pl. 27C をもとに作成)

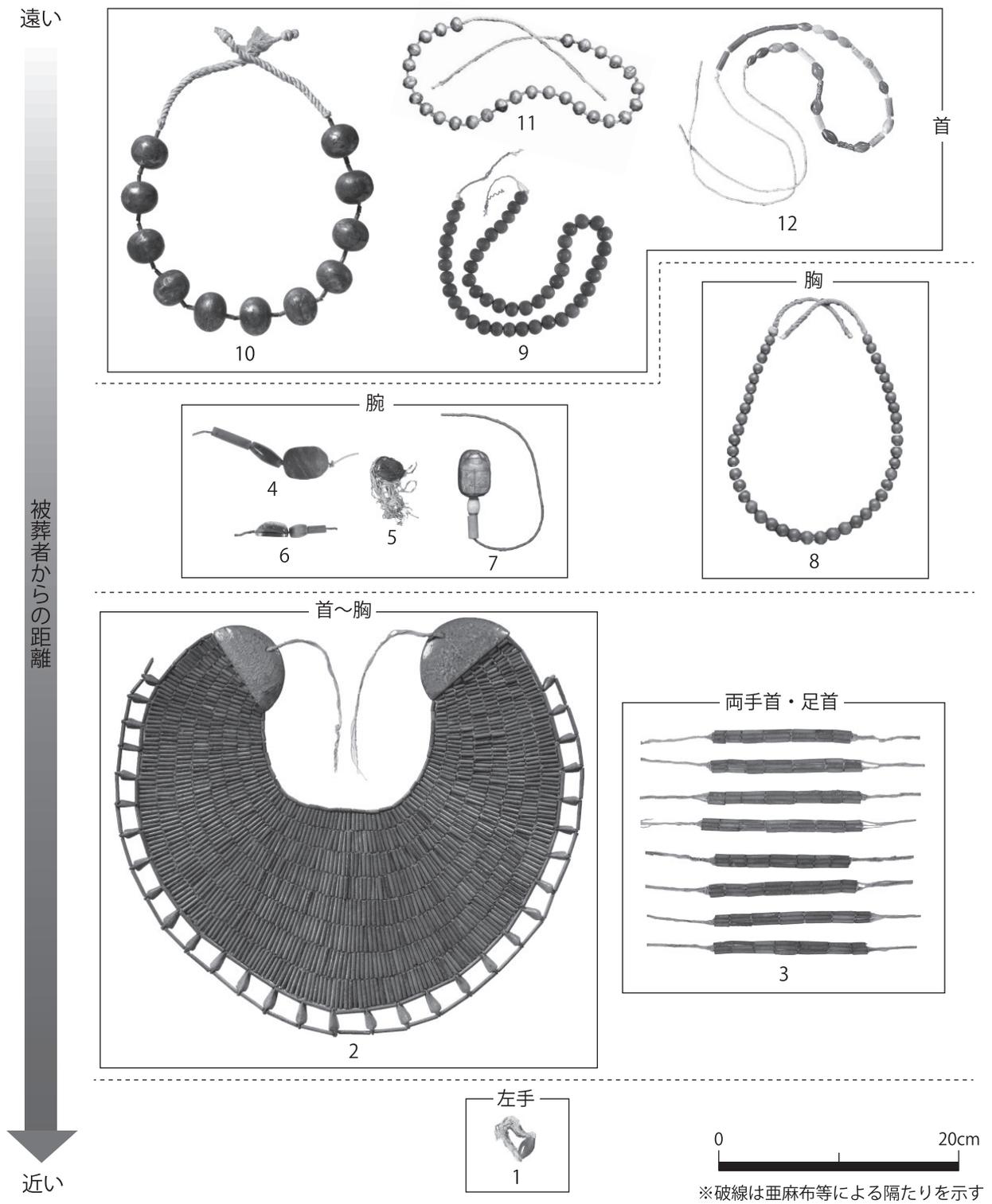


図3 テーベ、ウアフのミイラ包みから出土した装身具

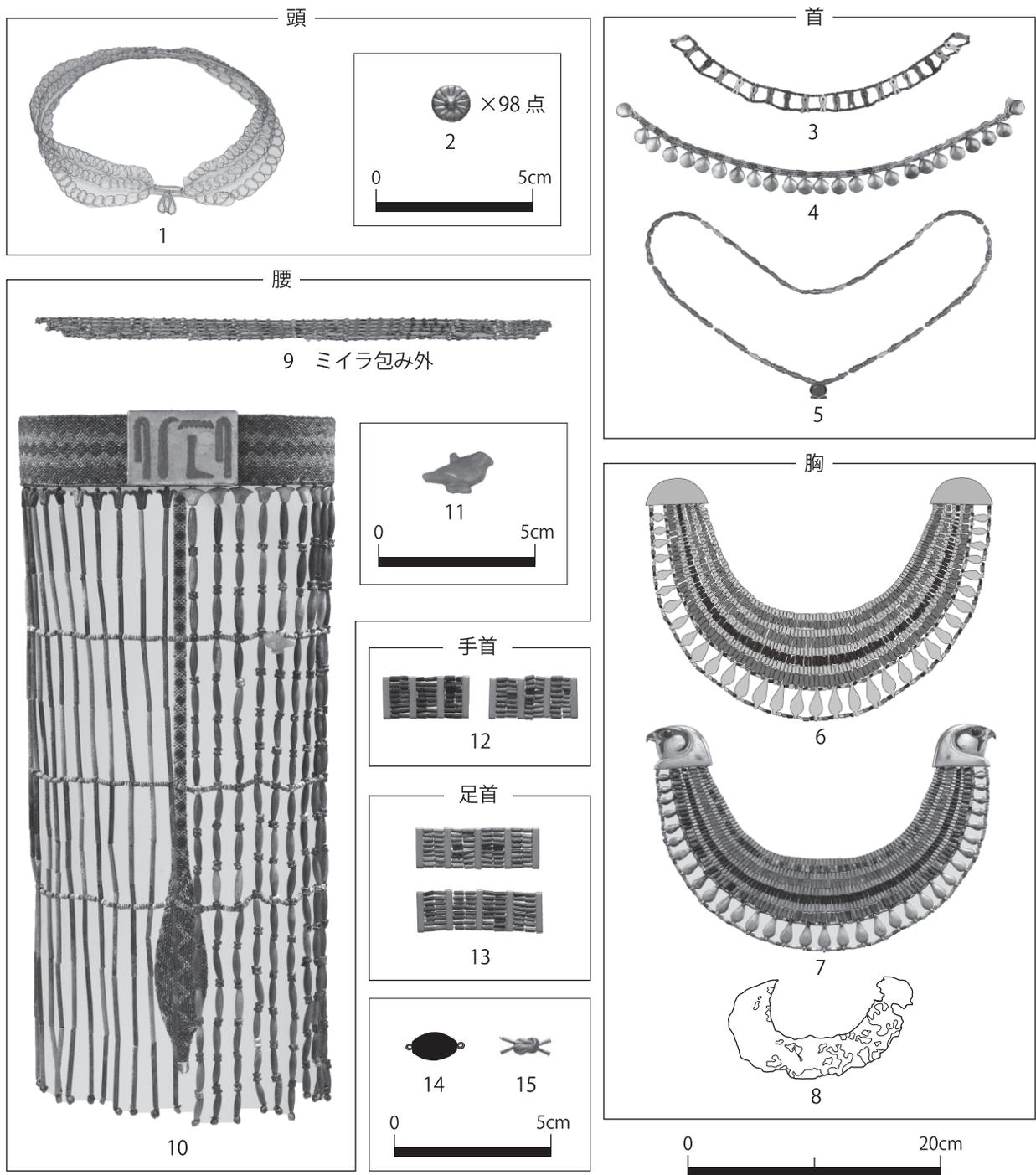


図4 リシェト遺跡セネブティシ墓から出土した装身具

みで構成される装身具であったのだろう。このように、典型的なセットである襟飾りと幅広腕輪・足輪が副葬された墓では、他の装身具についても規則性が見られる場合があることが分かった。

それでは、その他の装身具についてはどうであろうか。表1を見ると、球形や樽形ビーズで構成された首飾りは、襟飾りと幅広腕輪・足輪という典型的なセットを含むか否かに関わらず、普遍的に副葬品として使われていたことが分かる。当該期の一般的な装身具として位置づけられよう。それに加えて、典型的なセットを持たない埋葬においては、様々な護符が用いられる傾向が看取された (e.g. 図6)。そして、これらにはジェンダーを反映したものが多く見られる。たとえば、テティピラミッド墓地遺跡 Burial 41からはタカラガイ形護符が出土しているが (c.f. 図7)、これは多産性などを象徴した女性に関連する護符であると指摘されている (Golani 2014: 75-76; Andrews 1994: 42)。実際、Burial 41には少女が埋葬されていたと報告されている (Firth and Gunn 1926: 59)。また、アビュドス (Abydos) Tomb E45 (1) と女性が埋葬されたナガエッデイル (Naga ed-Deir) N453bからは、鉤爪形護符が見つまっている (図6 [15])、これらについても女性に属する足輪であった可能性が示唆されている (Eaton 1941: 97; Grajetzki 2014: 124)。さらに、アビュドス Tomb E30とフウ (Hu) W32からは、少女が髪飾りとして使ったと言われる金や銀製の魚形護符 (図5) が出土している (Grajetzki 2014: 117)。女性との関連性を示す装身具に加え、ダハシュール北 (Dahshur North) 遺跡 Shaft 54、ナガエッデイル N453b、ウアフ墓からは、亜麻糸にスカラベ形護符が通された指輪が出土している。古代エジプトの指輪の中では、スカラベ形護符を用いたものが最も頻繁に利用された。しかし、そのような指輪が一般的になるのは、第2中間期以降であると言われている (Grajetzki 2014: 125)。つまり、中王国時代におけるスカラベ形護符の指輪は、新たに使用され始めた段階の装身具であったと考えられる。スカラベ形護符の指輪を副葬する背景には、護符としての役割に加え、流行あるいは個人的な指向が反映されているのではないだろうか。さらに、ナガエッデイル N453bとアビュドス Tomb E45 (1) では、金あるいは銀製の大型円盤形ビーズが見つまっている¹⁾。また、本稿の対象墓からは出土していないが、同じく南部エジプトからは、他にもトルク (torque) と呼ばれる金属製の首飾りが複数の墓から発見されている (e.g. アビュドス 1008号墓; Frankfort 1930: 219, pl. XXXVII)。金属製の装身具が当該地域を特徴付けるものであった可能性が挙げられよう。このように、典型的なセットを含まない埋葬においては、様々な種類・デザインの装身具や護符が含まれる傾向

にあり、またそれらはジェンダーや特定の指向、地域性といった側面との結び付きが強いことが分かった。しかし、組み合わせという点では、これらの中に特定のパターンを抽出することはできなかった。何らかの規則に従って組み合わせられているというよりも、むしろ個人的嗜好によって選ばれていた様相を呈しているのである²⁾。

b) 副葬位置

対象墓において、装身具類は全て棺の中あるいは被葬者の身体上から出土している。また、それらは着装的配置、つまり着装状態あるいはそれを喚起させる配置 (光本 2003: 135) がされており、傍に置かれるといった副葬形態とは異なる。特筆すべきは、特定の護符と身体部分の関連性である。たとえば、タカラガイ形護符は腰部、二枚貝形護符は頸部、ヘス形護符は胸部といったように、共通の規則性が見受けられる。タカラガイ形護符は女性の多産性といった意味合いを持っていたと指摘されていることから、出産と関連する腰部との結び付きが強かったのであろう。さらに、テティピラミッド墓地遺跡 HMK 26, Coffin B、HMK 30とセネブティシ墓、ウアフ墓からは、紅玉髓製樽形ビーズが出土しているということはすでに述べたが、HMK 26, Coffin B、HMK 30とウアフ墓では、それらは共通して被葬者の左手から見つまっていることが分かった。地域的な隔たりを越えて何らかの規則に従っていたと捉えられる。

本稿では、副葬位置とはミイラ包み内の配置関係も意味する。装身具はしばしばミイラ包みの中に入れられたが、それらが未攪乱で発見される場合は少ない。そのような中、テティピラミッド墓地遺跡で発見された埋葬は、ミイラ包みが開封されそこから出土した装身具が報告された貴重な例である。しかしながら、ミイラ包み内における層状関係については詳細に言及されておらず、HMK 30 ゲムニエムハト (Gemniemhat) のヘス壺形護符が「肌に接して置かれていた (next skin)」という記述 (Firth and Gunn 1926: 54) が見られるのみである。ミイラ包みが開封されたもう一つの例として、テーベで発見されたウアフという男性のミイラが挙げられ、こちらは層状的な位置関係が詳細に報告されている (Winlock 1975)。そこでここでは、そのウアフの埋葬について詳しく見ていきたい。

ウアフは、メケトラ (Meketre) の墓に隣接するアメンエムハト 1世治世の簡素な岩窟墓に埋葬され、1920年に未盗掘で発見された (Hayes 1953: 303-305; Roehrig 2003: 11-13)。墓内には、箱型木棺や土器が置かれているのみであったが、木棺の中には亜麻布で何重にも包まれマスクを被ったミイラが横たわり、銅製の鏡や木製の枕、杖、サンダル、人物小像がともに納められていた。X線

撮影の結果、ミイラ包みの中に多数の装身具があることが判明し、開封されることとなった。まず、数十層の亜麻布を取り除くと、ミイラマスク全体が見えるレベルまで到達した (Winlock 1975: 72-73; Roehrig 2003: 11)。ミイラマスクを外し、さらに数十層の亜麻布を解くと、4つの一連ビーズ製首飾りがミイラに装着された状態であらわれた (図3 [9-12])。また6層ほどの包みを解くと、さらに球形ビーズが胸の上にあらわれたほか (図3 [8])、体の上で交差された腕の上から計4点のスカラベ形護符が見つかった (図3 [4-7])。このうち [5] は指輪であったと言われている。さらに幾層ものミイラ包みや詰め物を取り除いていくと、胸部から襟飾り (図3 [2])、腕・足首部か

らは幅広腕輪・足輪 (図3 [3]) が見つかった。襟飾りが首の後ろで束ねられておらず、ただ首筋で紐がねじられていただけであったことから、これは生前装着されたものではなく、副葬品として製作されたものであると推測されている (Winlock 1975: 75)。その後ミイラ包みは何層か続き、最後に見つかったのが紅玉髓製樽形ビーズであった (図3 [1])。これはセウエレット (sweret) ビーズと報告されている (Winlock 1975: 75)。このように、ウアフの装身具は全てミイラ包みの中から発見されたが、それらは複数の層に分けて入れられていたのである (図3)。

c) 王族以外の墓から出土した装身具の組成と配置の関係
装身具の組み合わせと層状的な配置の関係に注目すると、装身具の副葬に際する当時の認識が垣間見られる。というのも、セットで副葬される傾向があった襟飾り、幅広腕輪・足輪、そしてヘス壺形護符、紅玉髓製樽形ビーズ



図5 フウ遺跡 W32 から出土した魚形護符 (Petrie 1901: pl. XXVII)

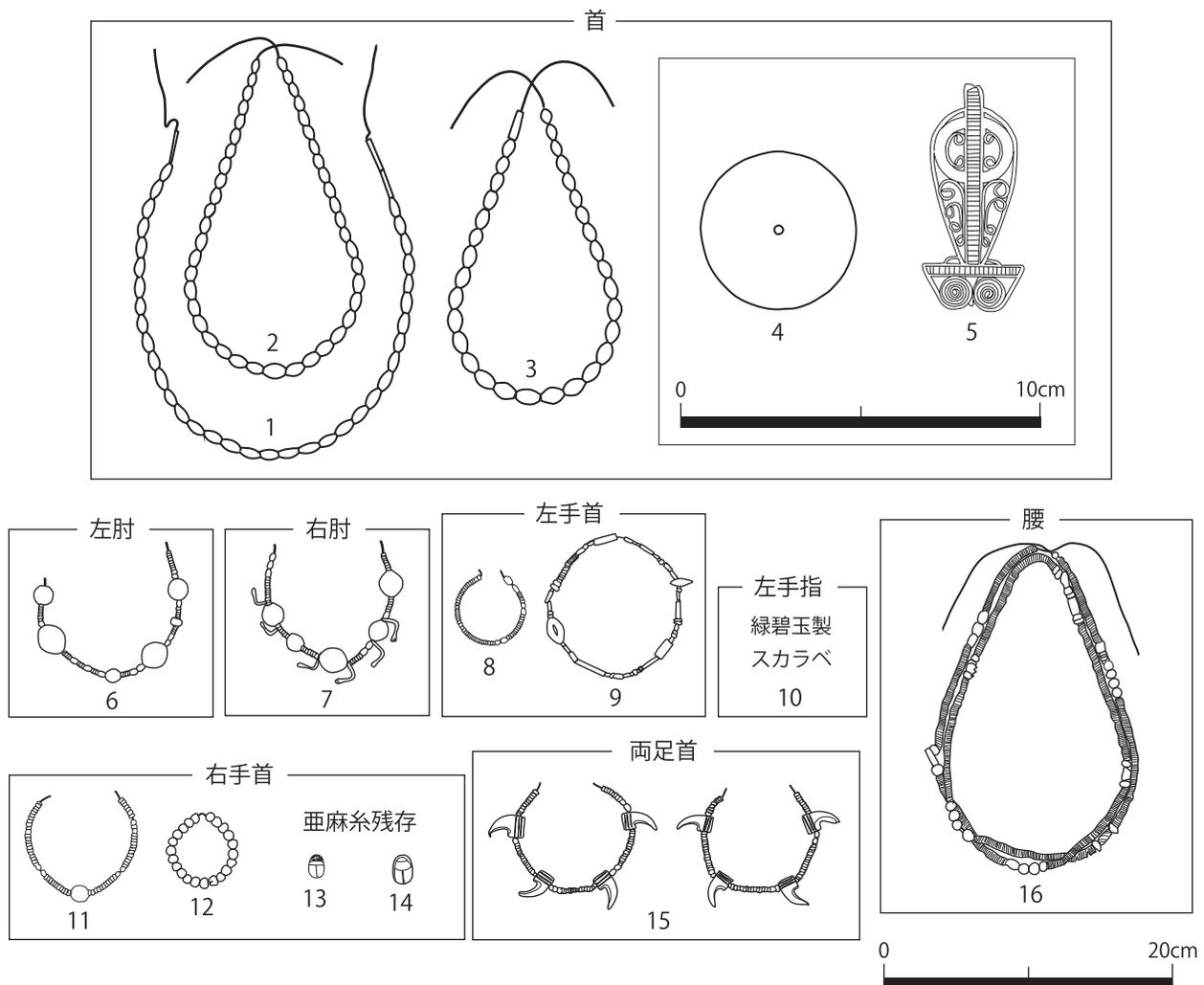


図6 ナガエッデイル遺跡 N453b から出土した装身具 (MFA21.970-21.973, 21.974, 21.980-21.982, 21.984, 21.985, 21.975-21.978, 21.979, 21.983 をもとに作成)

表1 本稿で対象とする王族以外の墓から出土した装身具

被葬者名	出土地/時期	出土墓と装身具の詳細	出典
イピアンクウ (Ipiankhu)	サッカラ テティピラミッド墓地 HMK26, Coffin B/ 中王国時代前期	複数人が埋葬された埋葬室付きシャフト墓。Coffin Bに入れられていたマスクを被った男性のミイラは手付かずで見えられた。そのミイラ包みの中から、1. 緑色施軸凍石ビーズ製襟飾り、2. 青色ファイアンスビーズ製幅広(小型)腕輪2点・足輪2点、3. 銅板の両端に穿孔が施された腕輪[右手首]、4. 銅製腕輪[左手首]、5. 紐に通された紅玉髓製樽形ビーズ[左手]、6. 金箔が施された木製壺形護符[胸]、7. 金箔が施された木製の半月形のもの[右掌]が見つかった。また、文章での記載は見られないが、報告書の写真によると、8. 木製あるいは金属製の襟飾りも出土している。	Firth and Gunn 1926: 50-51, pl. 34A
ゲムニエムハト (Ghememhat)	サッカラ テティピラミッド墓地 HMK30/アメンエムハト1世	未盗掘の埋葬室付きシャフト墓。木棺に入れられていたマスクを被った男性のミイラ包みの中から、1. 緑色施軸凍石ビーズ製襟飾り、2. 青色ファイアンスビーズ製幅広(小型)腕輪2点・足輪2点、3. 金箔が施された木製球形ビーズ製首飾り[首]、4. 紅玉髓・緑色施軸凍石製ビーズの連なり、5. 紐に通された紅玉髓製樽形ビーズ[左手]、6. 金箔が施された木製壺形護符[胸]、7. 金箔が施された木製の半月形のもの[右掌]が見つかった。また、文章での記載は見られないが、報告書の写真によると、8. 円筒形ビーズが1点出土している。	Firth and Gunn 1926: 52-54, pl. 27
イビヘルセセネブエフ (Iphersesenebef)	サッカラ テティピラミッド墓地 HMK69/中王国時代前期	深さ70cmほどの土壌墓。マスクを被った男性のミイラが木棺から発見された。上記2例ほど残存状況は良好ではないが、遺体上からは、1. 青色・黒色ファイアンスビーズ製幅広(小型)腕輪・足輪、3. 金箔が施された木製壺形護符[胸]が見つかった。また、文章での記載は見られないが、報告書の写真によると、4. 円形・雫形ビーズが出土している。	Firth and Gunn 1926: 55, pl. 32A, B
ヘテベト (Htept)	サッカラ テティピラミッド墓地 Burial 41/中王国時代後期	未盗掘の埋葬室付きシャフト墓。木棺から少女のミイラが発見された。遺体上からは、1. 銀製タカラガイ形護符の腰飾り[腰]、2. 金・銀製二枚貝形ペンダントの首飾り[首]、3. ライオン形金製(金箔)護符と緑色長石・ラピスラズリ・金箔が施された木製球形ビーズの腕輪2点[腕]、4. 紅玉髓・ガーネット・アメジスト製球形ビーズの首飾り3点が見つかった。	Firth and Gunn 1926: 59-60, pl. 37A, B; Grajetzki 2014: 95-97
不明	サッカラ テティピラミッド墓地 Burial 118/ おそらく中王国時代後期	南北軸シャフトの底部左側面に埋葬室(side chamber)が掘削されたシャフト墓。小型の木棺から子供の埋葬が発見された。遺体上からは、1. 青色・緑色ファイアンスビーズ製襟飾り[首]、2. 金製球形ビーズ製首飾り[首]、3. 青色・緑色ファイアンスビーズ製足輪[足首]、4. 銀製球形ビーズの連なりが見つかった。	Firth and Gunn 1926: 60, pl. 35A
不明	サッカラ テティピラミッド墓地 Burial 206/ 中王国時代後期	子供が埋葬された埋葬室付きシャフト墓。残状状況は良くないが、木棺の痕跡が見られる。遺体からは、1. 金製二枚貝形ペンダントが付属した首飾り[首]、2. ヒエログリフ <i>khnt</i> の形をした複数の金製護符[首]、3. 金製・紅玉髓ビーズ製首飾り[首]が見つかった。	Firth and Gunn 1926: 61, pl. 35B
不明	ダハシュール北 Shaft 54/ おそらく第12王朝後半	深さ3mほどの土壌墓。攪乱は受けていたが、木棺の中に入れられたミイラから、1. 輪形ファイアンスビーズ製腕輪[左手]と2. スカラベ形護符の指輪[左手]が見つかった。	Baba and Yazawa 2015: 1, fig. 3
セネブティン (Senebtisi)	リシエト センウセレトのmastaba内に あるシャフト/ アメンエムハト3世以降	ほぼ未盗掘で発見された埋葬室付きシャフト墓。木棺に入れられていた女性のミイラから、1. 金製の頭飾り[頭]、2. 金箔が施された花の形の髪飾り98点[頭]、3. ヒエログリフ <i>sa</i> の形をした紅玉髓・長石・トルコ石・牙製護符の首飾り(再構成)[首]、4. 金製二枚貝形ペンダントが付属した首飾り[首]、5. 金・ファイアンス・紅玉髓・トルコ石製壺形護符とヒエログリフ <i>shen</i> の形をしたペンダントの首飾り[首]、6. 半円形ターミナルが付属したファイアンス・トルコ石・金箔加工されたビーズ製襟飾り[胸]、7. 集の頭形ターミナルが付属したファイアンス・金・紅玉髓・トルコ石ビーズ製襟飾り[胸]、8. 金箔が施された銅製襟飾り[胸]、9. 紅玉髓・牙・トルコ石・ラピスラズリ・金製ビーズ製腰飾り[ミイラ包み外の腰]、10. 金箔・緑・青・黒色ファイアンスビーズ製エプロン[腰]、11. 紅玉髓製ツバ形護符[腰]、12. 金・ファイアンスビーズ製幅広(大型)腕輪2点[両手首]、13. 金・ファイアンスビーズ製幅広(大型)足輪2点[両足首]、14. 紅玉髓製樽形ビーズ、15. 金製留め具が見つかった。	Mace and Winlock 1916; Grajetzki 2014: 17-35
不明	リッカ Cemetery A, Tomb124/ センウセレト3世以降	埋葬室付きシャフト墓。天井の崩落により攪乱されていたが、盗掘は免れている。木棺に入れられた被葬者から、1. センウセレト2世の名前が用いられた紅玉髓・ラピスラズリ・金製ペンダント[胸]、2. センウセレト3世の名前が表された金製二枚貝形ペンダント[胸]、3. 紅玉髓・金・ラピスラズリ製ベクトラル[胸]、4. 金・ラピスラズリ製ミン神形護符、5. 襟飾りに用いられる大量のビーズが見つかった。	Engelbach 1915: 11-13, pl. I
ジェフティナクト (Djehuty-nakht)	デル・エル＝ベルシヤ/ センウセレト1世～ アメンエムハト2世	埋葬室付きシャフト墓。木棺やその中に入れられた被葬者から、ファイアンス・紅玉髓・金製の多様なビーズが見つかった。ビーズの形態と種類から、のちにビーズ製エプロンが復元された。	Kamal 1901: 213; Patch 1995: 106-108; Podvín 2000: 308-309; SR 11406
不明	ナガエッディル N453b/第11王朝後半	未盗掘墓。マスクを被った女性から発見された。1. 青色ファイアンスビーズ製首飾り[首]、2. アメジストビーズ製首飾り[首]、3. 紅玉髓ビーズ製首飾り[首]、4. 銀製大型円盤形ビーズ[首]、5. 銀製ウラエウス形ペンダント[首]、6. 紅玉髓・アメジスト・紅水晶・蛇紋石ビーズ製腕輪[左肘]、7. 紅玉髓・アメジスト・蛇紋石・銀製ビーズ製腕輪[右肘]、8. 紅玉髓・アメジストビーズ製腕輪[左手首]、9. 青色ファイアンス・紅玉髓ビーズ製腕輪[左手首]、10. 緑玉製スカラベ形護符[左手指]、11. 紅玉髓・アメジストビーズ製腕輪[右手首]、12. 球形青色ファイアンスビーズ製腕輪[右手首]、13. アメジスト製スカラベ形護符(亜麻系残存)[右手首]、14. 紅玉髓製スカラベ形護符(亜麻系残存)[右手首]、15. 紅玉髓・アメジスト製ビーズと銀製鉤爪形護符の足輪2点[両足首]、16. 緑色ファイアンス・紅玉髓・貝製ビーズと多様な護符の腰飾り[腰]が本来の位置から見つかった。	Eaton 1941; D'Auria, Lacovara and Roehrig 1988: 117-118
不明	アビュドス Arabah Tomb E30/ 第12王朝後半～ 第13王朝	mastabaに隣接し、部分的に攪乱された埋葬室付きシャフト墓。木棺に入れられた被葬者から、1. 上下冠を戴いた金製の隼形護符[胸]、2. 上下冠を戴いた銀製の隼形護符[胸](1, 2どちらか欠損)、3. 金製の魚形護符[胸]、4. 銀製の魚形護符[胸]、5. 金製鳥形護符[胸]、6. 銀製鳥形護符[胸]、7. 向かい合った金製の鳥形護符[胸]、8. 向かい合った銀製の鳥形護符[胸]、9. アメジスト製球形ビーズ製首飾り[首]、10. ガーネット製球形ビーズ・ファイアンス製スカラベ形を含む護符の腕輪[左手]、11. 紅玉髓製球形ビーズ製腕輪[右手首]が見つかった。	Garstang 1901: 4-5, 20, 24-25, pls. I, XVI, XXX
ムウトセント? (Mutsent)	アビュドス Arabah Tomb E45(1)/ 第12王朝後半?	複数人が埋葬された埋葬室付きシャフト墓。E45(1)は攪乱された状態で発見されたが、1. 金製大型円盤形ビーズ、2. 琥珀金製鉤爪形護符2点、3. アメジスト・銀製ビーズ(連なり?)が見つかった。	Garstang 1901: 5, 24-25, 32, pls. I, III, XV

表1 本稿で対象とする王族以外の墓から出土した装身具 (続き)

被葬者名	出土地/時期	出土墓と装身具の詳細	出典
不明	アビュドス Arabah Tomb E45(2)/ 第12王朝後半?	複数人が埋葬された埋葬室付きシャフト墓。未盗掘の子供の埋葬から、緑色ファイアンス球形ビーズ製首飾りが見つかった。	Garstang 1901: 5, 24-25, 32, pls. I, XVI
不明	アビュドス Arabah Tomb E45(3)/ 第12王朝後半?	複数人が埋葬された埋葬室付きシャフト墓。未盗掘のおそらく女性の埋葬から、1. 紅玉髓製ビーズ・ペンダントの首飾り、2. ガーネットビーズ製腕輪が見つかった。	Garstang 1901: 5, 24-25, 32, pl. I
不明	アビュドス Arabah Tomb E45(4)/ 第12王朝後半?	複数人が埋葬された埋葬室付きシャフト墓。未盗掘の子供(おそらく男子)の埋葬から、1. 紅玉髓・ガーネット・アメジスト・緑色ファイアンスビーズ製首飾り、2. アメジスト製スカラベ形護符[左掌]が見つかった。	Garstang 1901: 5, 24-25, 32, pl. I
不明	フウ W32/ 中王国時代後期～ (第二中間期?)	未盗掘墓。木棺に入れられた若年女性から、1. 金製魚形護符[頭]、2. 銀製魚形護符[頭]、3. アメジスト製スカラベ形護符3点[右腕]、4. 紅玉髓製円筒形・アメジスト製球形・紅玉髓製球形ビーズ・銀製隼形護符(複数の連なりか?)が見つかった。	Petrie 1901: 43; Grajetzki 2014: 110-111
ウアフ (Wah)	テーベ メケトラ一墓に隣接する 岩窟墓/アメンエムハト1世	未盗掘の簡素な岩窟墓。木棺に入れられていたマスクを被った男性のミイラ包みの中から、1. 垂麻糸に通された紅玉髓製樽形ビーズ[左手]、2. 青色ファイアンスビーズ製襟飾り[首～胸]、3. 青色ファイアンスビーズ製幅広(小型)腕輪・足輪計8点[両手首・足首]、4. 紅玉髓製樽形・円筒形ビーズとラビラスリ製スカラベ形護符の腕輪[腕]、5. 青色施釉凍石製スカラベ形護符の指輪[腕]、6. 施釉凍石製樽形・円筒形ビーズと銀・琥珀金製スカラベの腕輪[腕]、7. 施釉凍石製樽形・円筒形ビーズと銀・琥珀金製スカラベの腕輪[腕]、8. 青色ファイアンス球形ビーズ製首飾り[胸]、9. 青色ファイアンス球形ビーズ製首飾り[首]、10. 銀製球形ビーズ製首飾り[首]、11. 金製球形ビーズ製首飾り[首]、12. 紅玉髓・苔瑪瑙・乳石英・施釉凍石・白色黒色斑岩製樽形・円筒形ビーズ製首飾り[首]が見つかった。	Hayes 1953: 303-305; Roehrig 2003: 11-13; Winlock 1975

角括弧内には発掘報告書に記された出土位置を記している

は、ミイラ包み内において被葬者により近い層に入れられていたのである。ウアフのミイラ包み内において、最も被葬者に近い層に入れられたのは、左手に置かれた紅玉髓製樽形ビーズであった。そして、次に被葬者に近いミイラ包みの層には、襟飾りと幅広腕輪・足輪が入れられていたのである。その他の球形ビーズ製首飾りやスカラベ形護符が用いられた腕輪や指輪は、幾層もの亜麻布を隔て、被葬者から離れたミイラ包みの層に入れられていた。また、先述の通りテティピラミッド墓地遺跡で発見されたゲムニエムハトのミイラ包みにおいては、ヘス壺形護符が肌に接して置かれていた(Firth and Gunn 1926: 54)。被葬者に最も近い位置に置かれていたということである。こういった規則性は、当時の装身具カテゴリに対する認識³⁾を反映しているのではないだろうか。すなわち、多種多様な装身具が副葬品として使われていた中で、襟飾り、幅広腕輪・足輪、ヘス壺形護符、紅玉髓製樽形ビーズは、他の装身具とは一線を画すカテゴリに属していたということである。

4-2. 王族墓から出土した装身具の分析

王女など王族の墓においては、装身具は棺内だけでなく、棺外からも見つかっている。こういった「副葬分け」について、これまで詳細な検討はおこなわれておらず、棺内には襟飾りなど葬送用装身具が、棺外には生前身につけられた装身具が納められていたと述べられるに留まる(Mace and Winlock 1916: 58; Grajetzki 2014: 119)。そこで、そういった装身具の「副葬分け」について、より具体的に見ていきたい。

ここでは、中王国時代後期に年代付けられる複数の王族墓が発見されているダハシュール遺跡の資料を中心に扱

う。中でも比較的詳細に報告がされているイタ (Ita)、クヌメト (Khenmet)、サトハトホル (Sithathor)、メレレト (Mereret)、ヌブヘテプティ (Nubhetepiti) 王女、ウエレット II (Weret II) 王妃といった6例の王族墓を中心に、装身具の副葬について横断的に見ていきたい。

a) 組み合わせ

王族墓に副葬された装身具の共通セットとして、やはり襟飾りと幅広腕輪・足輪が挙げられる。盗掘により詳細が不明な墓を除くと、棺内には必ずこれらが副葬されていたのである。さらに、クヌメト墓とヌブヘテプティ墓では、ビーズエプロンや紅玉髓製ツバメ形護符がそれらと共に副葬されていた。これらは、本稿で対象とした王族以外の墓では、セネブティシ墓とジェフティナクト (Djehuty-nakht) 墓で見られた(表1、図4 [10] [11])。通常ビーズエプロンには動物の尾を模した装飾が付属する。また、盗掘により詳細は不明瞭であるものの、ウエレット II 墓の棺内からは、紅玉髓製樽形ビーズが出土している。なお、本稿の主な対象とはしていないが、ダハシュール遺跡のイタウエレット (Itaweret) 王女墓 (de Morgan 1903, 71-74) やホル (Hor) 王墓 (de Morgan 1895: 91-106)、ハワラ (Hawara) 遺跡のネフェルウプタハ (Neferuptah) 王女墓 (Farag and Iskander 1971) の棺内からも、襟飾りと幅広腕輪・足輪がセットで出土している。ホル墓とネフェルウプタハ墓では、さらにビーズエプロンや紅玉髓製ツバメ形護符も出土している。

これらの他には、多種多様且つ時には華美な装身具が出土している(図7)。華美な装身具とは、様々な護符が用いられていたり、王名がモチーフとなっていたりなど豊富

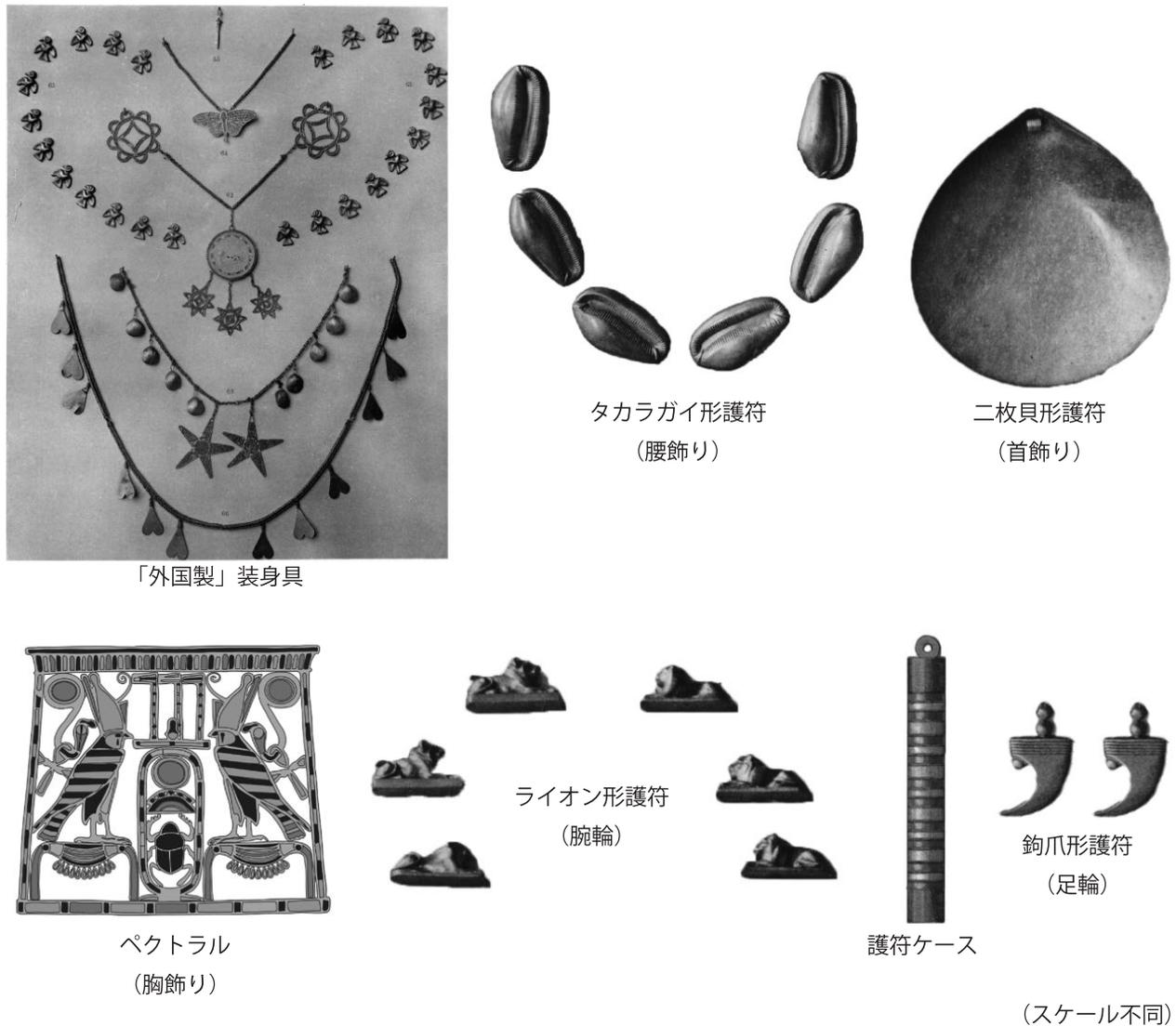


図7 対象とした王族墓の棺外から出土した装身具の例
(de Morgan 1895: pl. XV, 1, pl. XVII, 5, 6, 12, 23, pl. XIX, 56; de Morgan 1903: pl. XIIをもとに作成)

なデザインが施されたものを指す。たとえば、ライオン形護符の腕輪、二枚貝形ペンダントの首飾り、「外国製」装身具、護符ケース、ペクトラルといった装身具が複数の墓から出土している。これらは、どのような意味合いを持っていたのだろうか。ライオン形護符は、王女たちの腕輪として使われたとされているが、上述のテティピラミッド墓地遺跡の少女の埋葬 Burial 41 から同様の腕輪が出土している。タカラガイ形護符の腰飾りや鉤爪形護符の足輪と同じく、女性と関連する装身具であったと推測される。二枚貝形ペンダントは、本稿においては王女墓から出土しているほか、テティピラミッド墓地遺跡 Burial 41 と Burial 206、セネブティシ墓、リッカ (Riqqa) 遺跡 Tomb 124 から出土している。そして、これら4例の王族以外の墓に埋葬された被葬者は、女性2人、子供1人、不明1人であった。さらに、二枚貝形ペンダントの首飾りは、女性を

象ったファイアンス製小像にしばしば描かれた (e.g. Winlock 1923: 22, fig. 15; Robins 1993: fig. 17a)。以上より、二枚貝形ペンダントもやはり女性との結び付きが窺える。「外国製」の装身具は、クヌメト墓 (図7; de Morgan 1903: 67-68, pl. XII; Grajetzki 2014: 57) とメレト墓 (de Morgan 1895: 68) から出土している。これらはいずれも、エジプトの装身具とは明らかに見た目が異なっており、クレタ島などエジプト以外の地に由来する装身具であったと指摘されている (Lilyquist 1993: 36-37; Markowitz and Lacovara 2009: 60; Grajetzki 2014: 57, 92)。こういった装身具を持ち得る権力・財力や独自の指向性が反映されていると言えよう。護符ケースとは、両端にキャップの付いた円筒形の護符で、サトハトホル墓とメレト墓から出土している。また、本稿では主な対象としていない王族以外の例も含めると、出土墓が判明しているものだけで

少なくとも計15基の墓から出土している（ハラガ遺跡 A211, B275, B308, B336, B343, B354, B358, Wady1 532号墓 (Engelbach 1923)、ベニ・ハサン遺跡 487号墓 (Garstang 1907: 113, 226, fig. 104)、アビュドス E108 (Garstang 1901: 4) ; D303, S.ch. (Peet and Loat 1913) ; S44 (Peet 1914)、テーベの未報告墓)。性別ごとの出土墓数は、男性1基、女性6基、子ども1基、不明7基であった。中には、パピルスが入れられている例 (Garstang 1901: 4; Garstang 1907: 113) やガーネット片が入れられている例 (Janssen and Janssen 1992: 162; Brooklyn Museum 37.701 E, 13.1038; Oriental Institute Chicago 1567) が確認されている。最後にペクトラルは、サトハトホル墓とメレト墓に加え、ラフーン遺跡のサトハトホルイウヌト墓から (Brunton 1920: pls. 6, 11)、計5点出土している (山崎 2018: 表2, 図13)。王族以外にペクトラルが副葬された例は稀有であるが、リッカ遺跡 A124 と本稿の対象墓ではないがハラガ (Harageh) 遺跡の A124 から出土している (Engelbach 1923: 15, pl. XV.2)。これらペクトラルに施された装飾の主題は、E. フォイヒト (Feucht) によると、全て「王の教理 (king's dogma)」に分類される (Feucht 1967: 159, 161-166)。王族墓からは、他にも王名が表されたスカラベ形護符や、王名がモチーフとなった幅広腕輪などが確認された (表2)。こういった装身具は、王から下賜された可能性があり、それを副葬品に選択することは、死に際して王との親密性を示す意図があったのではないだろうか。組み合わせという視点で見ると、ペクトラル、ヒエログリフを象った護符 (Motto pendants)、ライオン形護符の腕輪、タカラガイ形護符の腰飾り、華美な幅広腕輪などが共通して複数の王女墓あるいは王妃墓から出土している。これらは、各々がジェンダーや王との親密性などを示すのと同時に、セットとして持つことで王族の女性という特別な社会的立場を表していたと考えられる。

b) 副葬位置

発掘報告書をもとに副葬場所ごとの出土装身具を示した表2を見ると⁴⁾、上記で指摘した特定の装身具 (襟飾り、幅広腕輪・足輪、動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロン、紅玉髓製ツバメ形護符、紅玉髓製樽形ビーズ) は、棺内から出土していることが分かる。一方、その他多種多様で華美な装身具は棺外から見つっている。幅広腕輪に関しては、棺内に襟飾りと共に副葬される傾向が見られた一方で、棺外にも副葬された例がある。しかし、メレト墓やラフーン (Lahun) 遺跡のサトハトホルイウヌト (Sathathoriunet) 王女墓の棺外から出土したものは、王名がモチーフになっている (de Morgan 1895: pl. XX;

Winlock 1934: pl. X)。棺内からは、そのような腕輪・足輪は出土していない。たとえば、ヌブヘテプティ墓やネフェルウプタハ墓の棺内からは、主に円筒形ビーズとスペーサービーズが用いられたシンプルな幅広腕輪・足輪が出土している (de Morgan 1895: pl. XXXVIII; Grajetzki 2014: fig. 54)。このように、幅広腕輪の中でもさらに種類によって副葬位置の違いがあったと考えられる。また、クヌメト墓などではバングルや鉤爪形護符が棺内から出土している。しかし、これらは棺外からも出土する装身具である。上記で挙げた襟飾り、動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロン、紅玉髓製ツバメ形護符、紅玉髓製樽形ビーズが棺外から見つかった例は確認されなかったのである。

c) 王族墓から出土した装身具の組成と配置の関係

王族墓から出土した装身具には、まず特定のセット関係が棺内の装身具に認められた。それらは襟飾り、幅広腕輪・足輪、動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロン、紅玉髓製ツバメ形護符であった。また、紅玉髓製樽形ビーズが棺内に入れられることもあった。一方、棺外にはより多様な装身具が副葬されていた。そして、それらは被葬者のジェンダーおよび呪術的意味合い、王との親密性、あるいは個人的な嗜好を表していた。以上の傾向は言い換えれば、被葬者とより近い位置である棺内と被葬者から距離のある棺外では、副葬された装身具の内容の違いが見られるということである。クヌメト王女の棺内から鉤爪形護符が見つかるように、両者の境界は曖昧な場合もある。しかしそのような中、襟飾りやビーズエプロン・紅玉髓製ツバメ形護符、1点の紅玉髓製樽形ビーズ製装身具が棺外に副葬された例は確認されなかったのである。また逆に、ペクトラル、「外国製」装身具、タカラガイ形護符、護符ケースなどは棺内に副葬されることはなかった。つまり、緩やかな境界ではあるものの、棺内と棺外の間には、装身具の副葬に際して明らかに異なる意識が働いていたと考えられるのである。

4-3. 中王国時代における装身具の「副葬分け」

以上、王族以外と王族の埋葬における装身具の副葬について、組み合わせと副葬位置を中心に検討した。その結果、ある特定の装身具セットが被葬者により近い位置に副葬されていたことが明らかとなった。それらは、襟飾り、幅広腕輪・足輪、ヘス壺形護符、紅玉髓製樽形ビーズ、動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロン、紅玉髓製ツバメ形護符である。王族以外の埋葬では、ミイラ包み内においてこれらは被葬者により近い層に入れられていた。また、王族墓では必ず棺内に入れられていたのである。そ

表2 本稿で主に対象とする王族の墓から出土した装身具

埋葬者名	出土地/時期	棺内出土装身具	棺外出土装身具	備考	出典
イタ王女 (Ita)	アメンエムハント3世ピラミッド 複合体内/ アメンエムハント3世	襟飾り[no. 5] 幅広腕輪[no. 8, 10] ゼット柱モチーフの重め金付き幅広腕輪[no. 9] 紅玉髄製ツタン形護符[no. 11] ピースエフロン[no. 12?] ハンダール(腕輪・足輪)[nos. 6, 7]	ビーズ(詳細不明)	未盗掘	de Morgan, 1903: 45-55, pl. VI; Patch 1995: 104; Grajetzki 2014: 50-54
クヌメト王女 (Khemmet)	アメンエムハント3世ピラミッド 複合体内/ アメンエムハント3世	襟飾り[nos. 1, 2, 3] アンクがモチーフの重め金[no. 10](首飾り) 鈎爪形護符[no. 11](足輪) saがモチーフの重め金付き幅広腕輪[no. 12] ハンダール[no. 13] 留め金[nos. 14, 15](幅広腕輪or足輪) スベータービーズ[no. 16](幅広腕輪or足輪) ヒエログリフの一部分を象ったビーズ[no. 9] その他ビーズ	冠[no. 19] 小型ターミナル[no. 36]・ヒエログリフがモチーフの襟飾り用ビーズ・帯形ペン ダント[nos. 49, 50](Grajetzki 2014: 56ではチョーガー) ヒエログリフを象った護符[nos. 29, 30, 34, 35] 結目形護符[no. 53] 「外国製」装身具[nos. 62-66] その他ビーズ[no. 51]	未盗掘	de Morgan, 1903: 55-68; Melandri 2012; Grajetzki 2014: 54-60
サトハントホル王女 (Sithathor)	セウセレト3世ピラミッド 複合体Tomb9/ アメンエムハント3世	盗掘により不明	ベクトラル[no. 1] 二枚貝形ペンダント[nos. 6, 7](首飾り) ヒエログリフを象った護符[no. 4](首飾り?) ゼット柱モチーフの留め金とスベータービーズ[nos. 2, 8, 9](幅広腕輪) ハンダール[nos. 10, 11] ライオン形護符[no. 12](腕輪?) タカラガイ形護符[no. 5](腕飾り?) ロータス・結目形護符[nos. 3, 13-15](腰飾り?) 鈎爪形護符[no. 23](足輪) 護符ケース[nos. 16, 17]	装身具が締められた 箱外の木箱は茶渋乱	de Morgan, 1895: 60-64; Arnold 2002: 70, 73, 124; Grajetzki 2014: 83-87
メレト王女? (Mereret)	セウセレト3世ピラミッド 複合体Tomb6/ セウセレト3世~ アメンエムハント3世	盗掘により不明	ベクトラル[nos. 1, 2] 二枚貝形ペンダント[nos. 3, 5, 10](首飾り) ペンダントと球形ビーズ製首飾り[no. 12] ハヤブサ形護符[no. 6](首飾り?) タカラガイ形護符[no. 7, 11](腰飾り?) 帯形ビーズ製首飾り(ベクトラルに付属か?) [no. 9] 結目形護符[no. 14](腕輪or足輪?) ヒエログリフを象った護符[nos. 29-32](首飾り?) ゼット柱モチーフの留め金とスベータービーズ[nos. 15, 16](幅広腕輪) ハンダール[no. 17] スベータービーズが用いられた幅広腕輪[no. 18] ライオン形護符[nos. 19](腕輪) 「外国製」指輪[nos. 33, 34] スカラベ付者指輪[nos. 35, 48] ヒョウ頭形護符[no. 8](腰飾り) 鈎爪形護符[no. 20](足輪) 護符ケース[nos. 55, 56]	装身具が締められた 箱外の木箱は茶渋乱	de Morgan, 1895: 63-72; Arnold 2002: 70-71; Grajetzki 2014: 87-93
ウエレット王妃 (Weret II)	セウセレト3世ピラミッド 複合体Pyramid 9/ セウセレト3世	紅玉髄製帯形ビーズ その他ビーズ (盗掘により詳細不明)	ゼット柱モチーフの留め金とスベータービーズ(幅広腕輪) ライオン形護符と留め金(腕輪) 結目形護符(腕輪) 結目形護符(首飾り) 王名付きおよび無葉飾スカラベ形護符(指輪) タカラガイ形護符(腰飾り) 鈎爪形護符(足輪)	箱内盗掘	Oppenheim 1996: 26; Arnold 2002: 75-82, 125-133; Grajetzki 2014: 85
ヌブテプティ王女 (Nubhetepi)	アメンエムハント3世のピラミッド 北側/ 第13王朝初期	襟飾り[no. 4] 襟飾りの産[no. 8; Grajetzki 2014: 77] 幅広腕輪[no. 7] 鈎爪足輪[no. 7] 円花飾り付き銀製留[no. 1] 紅玉髄製ツタン形護符[no. 6]	無し	未盗掘	de Morgan, 1895: 107-114; Grajetzki 2014: 71-81

no. は、参照報告書内(de Morgan 1895, 1903)における遺物番号に対応している。括弧内に書かれた装身具名称は想定される装身具の種類を記している。

の他装身具は、球形ビーズを一つに連ねたものから様々な護符を用いたものまで多岐に渡り、被葬者のアイデンティティを反映していた。そしてそれらは、ミイラ包み内において被葬者から遠いミイラ包みの層に入れられていた。同様の装身具は王族墓からも出土しており、さらに王族墓からは王との親密性を示す装身具も確認された。それらは、被葬者から距離のある棺外に副葬されていたのである。すなわち、王族・非王族の埋葬ではともに、装身具の種類によって意図的に「副葬分け」がおこなわれていたと考えられる。

5. 中王国時代の装身具カテゴリの復元

本章では、実際の「副葬分け」を踏まえ、さらに図像・文字資料を考慮することで、当時の装身具カテゴリの復元を試みる。

5-1. 装身具の「描き分け」との比較

中王国時代の装身具は、様々なものに図像としても描かれた。ここでは、媒体とそこに描かれた装身具の種類を整理し、実際の「副葬分け」との比較をおこなう。

本稿では、主にオブジェクト・フリーズ (*frise d'objets*)、ミイラマスク、人型木棺、ファイアンス製女性小像 (*faience fertility figurines*)、木製板状女性小像 (*paddle dolls*)、石製彫像に表された装身具を見ていきたい。オブジェクト・フリーズとは、箱型木棺の内側に描かれた装飾帯で、様々な物の絵とその名前や配置場所、素材等が示されたラベルで構成される。描かれた物に関しては、20世紀前半に G. ジェキエ (Jéquier) によってまとめられ (Jéquier 1921)、オブジェクト・フリーズ全体が持つ機能や意味合いについては H. ウィレムズ (Willems) によって体系的な研究がおこなわれた (Willems 1988)。彼によると、オブジェクト・フリーズは日用品や儀式の道具が並置されているだけのものではなく、そこには複数の葬送儀礼それ自体が表されているという (Willems 1988: 200-209)。

筆者は別稿において、これらに描かれた装身具の種類を分析し、媒体によって装身具が描き分けられていたことを指摘した (山崎 2016; Yamazaki 2018: 434-440)。まず、葬送と密接に関わるオブジェクト・フリーズ、ミイラマスク、人型木棺には、襟飾りとセウエルト (*swrt*) ビーズ (赤色樽形ビーズの首飾り) が主要な装身具として描かれた。また、人型木棺とオブジェクト・フリーズには、ともにビーズエプロンが描かれた (e.g. Lacau 1904: 199-200; Baba and Yoshimura 2010: 11)。オブジェクト・フリーズにはさらにツバメ形護符が描かれたほか、幅広腕輪・足輪も襟飾りと同程度頻繁に見られる。一方、現世における女性の踊り子を表していると言われるファイアンス製女性小

像と木製板状女性小像には (Tooley 1989: 311; Morris 2011)、主に一連ビーズ製首飾り (二枚貝形護符の表現を含む) やチョーカー、タカラガイ形護符の腰飾りが描かれていた。壁画には女性が鉤爪形護符の足輪を身に着けた姿で描かれた例があるが (Petrie 1930: pl. XXIV)、やはり踊り子を表した図像である。さらに、実際に使用された痕跡のあるコホル壺に施された女性の像は、魚形護符の髪飾りとタカラガイ形護符で構成された腰飾りを身に着けた姿で表現されている (Kemp and Merrillees 1980: 148)。最後に、神殿等にたてられた石製彫像は、表現している神や人物、動物が永遠に宿るためのものとしての役割を担い、記念物として儀式に用いられた (Hartwig 2015: 191-192)。棺やミイラマスクとは異なり、葬送に際して必要とされたものというよりは、記念物や信仰の対象としての性質が強かったと捉えられる。それらには、襟飾りが表される場合もあったが、棺やミイラマスクのように必須の表現ではなかったようだ。それよりも、護符が付属した一連ビーズ製首飾りが主要な装身具として挙げられるほか、ペクトラルが表現されることもあった。このように、装身具はコンテキストによって「描き分け」られていたと言える。そして、この「描き分け」と実際の「副葬分け」は一致する点が多い。棺やミイラマスクに描かれた襟飾り、幅広腕輪・足輪、赤色樽形ビーズ、ビーズエプロン、ツバメ形護符は、全て被葬者の近くに副葬されたものなのである⁵⁾。一方、女性像やその他遺物に表されたタカラガイ形護符の腰飾りやペクトラルなどは、王族墓において棺外に配置された。なお、実際に副葬品として使われた装身具の中には、図像として表現されなかったものもある。たとえば、護符ケースや大型円盤形ペンダントは、どこにもその描写が見られない⁶⁾。おそらくこれらは、図像表現がされないほど世俗的な装身具であったと考えられる。すなわち、埋葬と直接関係する棺やミイラマスクに描かれた装身具と、より現世との関わりが強いその他遺物に描かれた主要な装身具あるいは図像表現さえされなかった装身具の種類には違いがあり、その違いは副葬位置による違いと類似しているのである。この「副葬分け」と「描き分け」の一致は、当時の装身具に対する認識を反映していると考えられる。

5-2. 特定の装身具と葬送儀礼との関係

これまでの分析により、襟飾り、幅広腕輪・足輪、紅玉髓製樽形ビーズ、動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロン、紅玉髓製ツバメ形護符、ヘス壺形護符といった特定の装身具は、被葬者に近い位置に副葬され、また一部は棺やミイラマスクに主要な装身具として描かれていたことが分かった。したがって、これらは葬送において特に重要視されたものであったことは容易に推測できる。それで

は、具体的にこれらの副葬には、どのような意図・意味があったのだろうか。ここでは、図像・文字資料を手掛かりに、特定の装身具と葬送儀礼との関係に迫りたい。特に、これまで先行研究によってオブジェクト・フリーズと葬送儀礼との関係が深く追求されてきた (Willems 1988, 1996, 1997)。そこで、本稿では主にそのオブジェクト・フリーズとの比較をおこなう。

まず、オブジェクト・フリーズには多くの装身具が確認されている中、襟飾りは幅広腕輪・足輪とセットでほとんど省略されることなく描かれた (Willems 1988: 215)。また、ラベルには、金の襟飾りやハヤブサの襟飾り、トルコ石の襟飾りなど多数の種類が示されている。これは、実際の考古資料においても確認された。テティピラミッド墓地遺跡 HMK 26, Coffin B から出土した襟飾りは、オブジェクト・フリーズにおける緑色石の襟飾りと金の襟飾りに対応すると考えられる。また、セネブティシ墓から出土した3点の襟飾りは、それぞれハヤブサの襟飾り、様々なビーズの襟飾り、金の襟飾りに対応すると考えられる。このように、複数の襟飾りが副葬される際に、異なる種類が選択された背景には、オブジェクト・フリーズにおける表現が関係しているのではないだろうか。つまり、葬送に必要なものが描かれたオブジェクト・フリーズが示すように、様々な種類の襟飾りを副葬することが理想的であると捉えられており、それが実際の副葬にも反映されていたと考えられるのである。

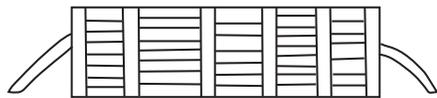
幅広腕輪・足輪は、実際の考古資料では大型と小型に分けられるということであった。そしてこれは、オブジェクト・フリーズにおいても同様である (Jéquier 1921: 97-102)。図像表現が大型と小型に分けられるとともに、それぞれに異なる名称が与えられていたのである。こういった一致からも、実際の副葬行為とオブジェクト・フリーズとの間に関連性があったと読み取れる (図8)。また、図像とラベル部分が判読できる木棺資料約20点を対象に⁷⁾、

描かれた腕輪・足輪の同一木棺内における組み合わせを追った結果、20点中最低でも14点の木棺で腕輪と足輪はセットで示されていた。壁画などでは、足輪は女性が装着する傾向にあるが (Robins 2015: 124)、オブジェクト・フリーズには男女関係なく腕輪・足輪がセットで表される。葬送においては、男女ともに両方をセットで装着することが重要視されていたのではないだろうか。そして、これはやはり実際の副葬にも反映されている。前章で指摘した通り、襟飾りが副葬された墓の多くでは、幅広腕輪と足輪の両方が出土しているのである。

このように、襟飾り、幅広腕輪・足輪は、実際の副葬および描写においてもセットとして捉えられていた。そして、両者は明らかにオブジェクト・フリーズに表された何らかの葬送儀礼に則って副葬されていたようである。

続いて、本稿では紅玉髓製の樽形ビーズが複数の墓から確認された。赤色樽形ビーズの装身具として、オブジェクト・フリーズに表されたセウエレットビーズと呼ばれる首飾りが広く知られている。ラベルにはしばしば首や胸が配置場所として示され、実際に人型木棺やミイラマスクの頸部に描かれた。そして、「セウエレット」が古代エジプト語の *swr* 「飲む (drink)」と関連することから、死者が永遠に飲食できるようにという意味が込められていた可能性が指摘されている (Grajetzki 2014: 27)。セネブティシ墓からは副葬位置不明の紅玉髓製樽形ビーズが出土しているが、これは本来セウエレットビーズとして使われていたと推測されている (Mace and Winlock 1916: 62-63)。また、ウアフ墓では亜麻糸に通された1点の紅玉髓製樽形ビーズが被葬者の左手から発見された。前章で触れたように、ウィンロックはこれをセウエレットビーズと捉えたが、どうして左手の位置に置かれたのかは不明であると述べていた (Winlock 1975: 75)。おそらく彼は、単なる配置間違いか何かであると考えたのではないだろうか。しかし本稿では、テティピラミッド墓地遺跡 HMK 26, Coffin B と HMK 30 に

オブジェクト・フリーズに描かれた幅広腕輪・足輪



大型 (「メンフェレット」等の名称)



小型 (「ハデレット」等の名称)

実際に墓から出土した幅広腕輪・足輪 (左: セネブティシ墓、右: ウアフ墓)



大型



小型

図8 オブジェクト・フリーズに描かれた幅広腕輪・足輪と実際の出土遺物の一致例

においても、紅玉髓製樽形ビーズの装身具が被葬者の左手の位置に置かれていたことを指摘した。複数の埋葬において、同じ種類の装身具が同じ場所に置かれていたのである。そこで、オブジェクト・フリーズに描かれた装身具を詳細に見ていくと、関連する描写があることが判明した。それは、「ジェレト (*drtt*)」という名称が与えられた赤色樽形ビーズの装身具である (Lacau 1903, 1904: 185, fig. 448)。ジェレトとは、古代エジプト語で「高価な石」を意味する。そして、ラベル内のジェレトという名称に続いて、*r drt.f i3bt* つまり「彼の左手に」という配置場所が示されている例が確認されたのである (Lacau 1906: 57)。したがって、ウアフ墓やテティピラミッド墓地遺跡 HMK 26, Coffin B, HMK 30 で見つかった紅玉髓製樽形ビーズの装身具は、セウエレットビーズではなく、このジェレトビーズとして副葬されたと考えられる⁸⁾。ここでもやはり、オブジェクト・フリーズに表された葬送儀礼を意識し、それに則った副葬行為がおこなわれていたと言える。

セネプティシ墓や主に王族墓で確認された動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロンと紅玉髓製ツバメ形護符は、セットで衣装として使われた (Patch 1995: 93-96)。また、これらもオブジェクト・フリーズに表された装身具である。特に、儀式に用いる道具が豊富に描かれたアメンエムハト 2 世治世以降のオブジェクト・フリーズに頻繁に見られるという (Willems 1988: 218, 220-221, table 13)。

ここまで、襟飾り、幅広腕輪・足輪、セウエレットビーズ、ジェレトビーズ、動物の尾を模した装飾が付属したビーズエプロン、紅玉髓製ツバメ形護符とオブジェクト・フリーズとの関係について検討してきた。これらは全て、オブジェクト・フリーズに表された葬送儀礼のうち、死者に様々な物を差し出す儀式的な行為 (*ceremonial act of presenting the objects to the deceased*) である食糧以外の供物儀礼 (*object ritual*) に該当する (Willems 1988: 200-201)。オブジェクト・フリーズには、複数の葬送儀礼が表現されたが、その大部分を占めるのがこの食糧以外の供物儀礼なのである (Willems 1988: 200-209)。さらにこれは、「個人的な供物儀礼 (*private object ritual*)」と「王族の供物儀礼 (*royal object ritual*)」に細分される (Willems 1988: 205)。両者の境界は明確ではないものの、「王族の供物儀礼」はピラミッドテキストに起源している。ピラミッドテキストの例として、古王国時代のペピ 2 世 (Pepi II) の妻ネイト (Neith) 王妃のものが挙げられる (Jéquier 1933)。ネイト王妃の墓に書かれたピラミッドテキストは、その大部分が本来の状態を保っている貴重な例である (Allen 2005: 309)。そこには、食糧供物 (*Speiseritual*) に続いて、北壁に食糧以外の供物儀礼に関するリス

トが書かれている (Willems 1988: 203-204)。それを見ると、杖や笏、短剣などに加え、ツバメ形護符 (*sigt*) (cf. Patch 1995: 110) とビーズエプロン (*db3*) が挙げられている (Jéquier 1933: pl. XII; Allen 2005: 318)。また、墓から実際に出土したビーズエプロンには、動物の尾を模した装飾が付属していたということであったが、このリストには動物の尾 (*hbst*) も含まれているのである。さらに、このリストにおいてそれぞれの文頭は、“Recitation. Osiris Neith” で始まっており、ネイト王妃の名前の前にはオシリス神の名前が示されている (Allen 2005: 318-319)。ピラミッドテキスト内で被葬者の名前の前に「オシリス」が付く箇所は少ないという点を考慮すると、ここに示された物の特別性が浮き彫りになる。古代エジプトの葬送観念で重要な死者とオシリス神との同一視という側面と深く関係すると考えられるのである。しかし、このリストの中には、上記で挙げた他の装身具は含まれない。つまり、襟飾り、幅広腕輪・足輪、セウエレットビーズ、ジェレトビーズは、ピラミッドテキストに起源を持つ「王族の供物儀礼」ではなく、「個人的な供物儀礼」に属すると考えられるのである (Willems 1988: table 13)。

最後に、ヘス壺形護符は、テティピラミッド墓地遺跡やセネプティシ墓から見つかっている。ヘス壺は、死者を清める際に用いられる容器であり、すでに護符の種類・意味としても指摘されている (Jørgensen 1996: 146)。通夜 (*hourly vigil*) を迎える前におこなわれる儀式の一つに「清めの儀式 (*purification rite*)」というものがあり (Willems 1997: 365)、オブジェクト・フリーズにおいても濾し器 (*sieve*) やアंक (*ankh*) と呼ばれるシンボル、容器など、清め場 (*Purification Tent*) において使われる道具が多数表現されている (Willems 1997: 344-347)。そこに示された容器はヘス壺ではないため、オブジェクト・フリーズとの関係性は不明瞭であるが⁹⁾、ヘス壺形護符が死者の清めを象徴した可能性は十分考えられるであろう。

さらに、テティピラミッド墓地遺跡からは、装身具とは言えないものの、半円形を呈した遺物が複数のミイラ包みから出土している (図 2 [7])。これらは、パンを表しており、食糧供物を象徴したと言われている (Jørgensen 1996: 146)。古代エジプト語でパンを意味するヒエログリフ “*i*” と同じ形をしていることから、その可能性は高い。そして、オブジェクト・フリーズは主に食糧以外の供物儀礼と深く関わったが、頭部面と足部面のオブジェクト・フリーズは食糧供物に由来しているのである (Willems 1988: 203)。

5-3. 葬送における装身具カテゴリの復元

中王国時代の装身具が葬送に際してどのようにカテゴラ

「副葬分け」

「描き分け」

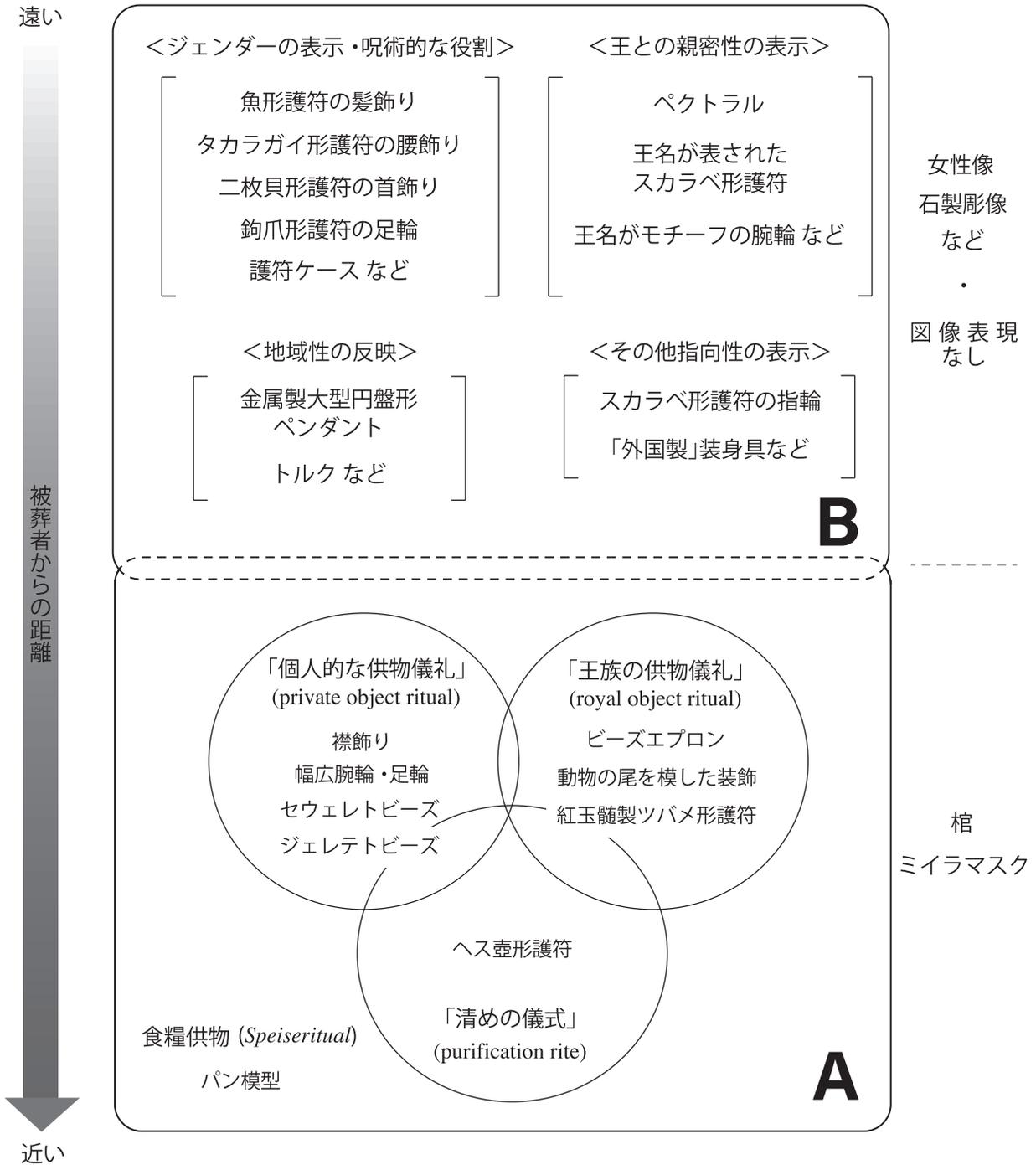


図9 中王国時代の葬送における装身具カテゴリーの復元

イズされていたのかを改めて図9に示した。Aに分類される装身具は、いずれも葬送儀礼と密接に関わる装身具であったが、上記のように葬送儀礼の内容によってさらに細分される。また、Bの装身具に関しても、ジェンダーおよび関連する呪術的意味合い、地域性、王との親密性、独自の指向の表示といったように、意味合いが細分されていたと考えられる。なお、図9のBに属する装身具に関して

は、ごく一部しか提示していない。実際には、より多種多様な装身具・護符が該当する。また、その意味合いもより多様であったと考えられる。

6. 結論

分析結果を踏まえ、最後に各カテゴリーの装身具が葬送に際して担った役割について考えたい。まず、図9のカテゴリ

り A に分類される装身具は、専ら葬送儀礼と密接に関わる装身具である。そして、その葬送儀礼は複数種類あることが分かった。これまでは、オブジェクト・フリーズにおいてそのような複数の葬送儀礼が表されたと指摘されてきた (Willems 1988, 1997)。本稿では、それがさらに被葬者の身体上においても、組成と配置関係によって再現されていた様子が窺えたのである。つまり、これらは単なる護符としての機能に加え、一連の葬送儀礼を再現することでそれらに永続性を持たせる役割があったと考えられる。実際にはカテゴリ A の装身具を完璧に所有していない被葬者であっても、本来理想としていたのは、そういった複数の葬送儀礼の再現・永続化であったと捉えられる。

一方、カテゴリ B に属する装身具は、より世俗的な性質を持つ。これらは、被葬者あるいは被葬者が属した集団のアイデンティティを示す役割を担っていたと言える。たとえばウアフ墓からは、襟飾り、幅広腕輪・足輪、ジュレトビーズといったカテゴリ A に属する装身具に加え、カテゴリ B に属するスカラベ形護符が用いられた腕輪や指輪などが出土している。その中で、銀製のスカラベ形護符の背面には、彼の名前と称号、さらに仕えたとされるメケトラの名前が表されている。まさに被葬者のアイデンティティを示す装身具である。それらはウアフのミイラ包みの中で、カテゴリ A の装身具より被葬者から離れた層に入れられていた。そしてこの副葬位置からは、実際のミイラ化の儀式 (mummification ritual) の過程が窺える。つまり、カテゴリ A に属する装身具が先にミイラ包みの中に入れられた後、儀式の後半でカテゴリ B の装身具が用いられたという流れである。ウアフの埋葬では、カテゴリ B の装身具も葬送儀礼の中で用いられたと考えられるのである。また、中王国時代後期のセネプティシ墓や複数の王族墓においては、カテゴリ A の装身具セットを完璧に近い状態で所有していても、カテゴリ B に属する装身具が副葬されていた。カテゴリ B の装身具は、一般に葬送用品に描かれたり葬祭文書の中で言及されたりはしなかったものの、現実には重要な副葬品として認識されていたのではないだろうか。

このように、中王国時代における装身具の副葬には、葬送儀礼の再現・永続化といった側面が意識されていたと共に、アイデンティティを示すことも重要視されていたと考えられる。ただしこれは、比較的社会階層の高い人々にのみ当てはまると捉えるべきである。なぜなら、本稿ではカテゴリ A に属する装身具を全く持たない埋葬も確認されたからである。これらの埋葬では、異なる葬送観念のもと、様々な装身具・護符が副葬されたと考えられよう。

謝辞

本稿は日本西アジア考古学会第 22、23 回大会での口頭発表が骨子となっている。また、本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費 JP17J02366 の助成を受けたとともに、同会の若手研究者海外挑戦プログラムを利用し、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学 (KU Leuven) においておこなった研究成果の一部を含んでいる。受入研究者の Harco Willems 教授には、定期的に研究指導を賜り、特に本稿の「5. 中王国時代の装身具カテゴリの復元」と「6. 結論」は、Willems 教授からの助言および教授との議論が基盤となっている。ここに記して深く感謝申し上げる。

註

- 1) 本稿では対象にしていないその他の南部エジプトに分布する多数の墓からも同様のビーズが出土している (e.g. カウ遺跡 977 号墓 (Brunton 1927)、アビュドス D104・D161 号墓 (Peet and Loat 1913)、アビュドス S12 号墓 (Peet 1914))。
- 2) 同様の傾向は、古王国時代後期から第一中間期における護符の副葬にも見られる。カウ (Qau) 遺跡では、ビーズや護符は明らかに女性・子どもと関連していたが、特定の組み合わせはなく、個人的な選択によって副葬されたと考えられているのである (Op de Beeck 2005: 515)。ジェンダーと強く結びつく装身具・護符については、中王国時代以前から個人的な祈りや指向によって選択されていたと言えよう。ただし、本稿では特定の地域に特徴的な装身具についても言及した。これらに関しては、その地域で独自に形成された何らかの観念に従っていたなどの背景も考えられるため、今後詳細な分析を行う必要がある。
- 3) 物や死者の身体がどのように認知されていたのかは、認知考古学の分野で活発に議論されてきた。特に古墳時代研究では、副葬品配置に関する分析がおこなわれている (e.g. 光本 2003)。本稿でおこなった副葬品配置の分析も、物と身体との関係性や死者の身体性を読み取ることを意図している。また、対象遺物に対する当時の認識に注目した研究として、中村耕作氏による縄文土器の儀礼利用における「カテゴリ認識」研究が挙げられる (中村 2013)。中村氏は、「カテゴリ認識とは、モノ同士の関係性、象徴・価値など当時の社会における様々なレベルで想定されるエミク的な分類観念・価値認識である」と述べる (中村 2013: 5)。本稿で言及する装身具のカテゴリやそれに対する認識も、当時の社会における意味や価値を意図したものである。
- 4) 本来ならば王族墓における装身具の副葬位置として、棺外に加え棺内の副葬位置つまりミイラ包みにおける層状関係も考慮すべきであるが、資料の制約上難しい。そこで本稿では、大きく棺内と棺外という分け方を採用した。したがって、この分類名称は王族墓ではミイラ包み内に装身具が入れられなかったことを示唆しているわけではない。
- 5) そもそもミイラマスクや人型木棺は被葬者の身体そのものと捉えられていたため、この一致は当然であるとも言える。
- 6) ただし護符ケースについては、文字資料の中に関連する言及があると言われている (Janssen and Janssen 1992: 163; Op de Beeck 2005: 513-514)。本稿でも取り上げた、ガーネット片が入れられた護符ケースの例と関わるような言及が Pap. Berlin 3027, Spell 2, 2-7 の母子を守る呪文に見られるのである (Borghouts 1978: 42-43)。葬送儀礼とは関係のないこの呪文に加え、実際の護符ケースには生前装着された痕跡が見られるという (Janssen and Janssen 1992: 159)。文字資料で言及されていたとしても、護符ケースは世俗的な装身具であったと言える。

- 7) カイロ・エジプト博物館 (Lacau 1903, 1904, 1906)、大英博物館オンラインカタログ、その他報告書類 (Birch 1886; Hayes 1953; Willems 1996) をもとに集めた資料である。
- 8) これまで、中王国時代前期におけるテーベの墓 (e.g. メケトラー墓) とテティピラミッド墓地遺跡の墓 (e.g. ゲムニエムハト墓) について、埋葬室や箱型木棺の装飾、副葬された木製模型が類似していることが指摘されてきた。そして、墓の年代や当時のテーベとメンフィス地域との関係性が議論されている (Willems 1988: 105-106; Willems 2014: 168-169, note 138, 173-174)。本稿ではさらに、テーベのウアフ墓とサッカラ、テティピラミッド墓地遺跡の複数の埋葬との間には、小型幅広腕輪・足輪やジェレトビーズといった装身具の副葬にも共通点が見られることが分かった (e.g. 図2, 3)。両地域の繋がりを示すさらなる証拠として位置づけられるであろう。
- 9) オブジェクト・フリーズにもヘス壺は描かれたが、「清めの儀式」と関連付けられた描写であったかは不明瞭である。

参考文献

- Aldred, C. 1971 *Jewels of the Pharaohs*. London, Thames and Hudson.
- Allen, J. P. 2005 The Ancient Egyptian Pyramid Texts. In P. D. Manuelisn (ed.), *Writings from the Ancient World* 23. Atlanta, Society of Biblical Literature.
- Andrews, C. 1990 *Ancient Egyptian Jewellery*. London, British Museum Publications.
- Andrews, C. 1994 *Amulets of Ancient Egypt*. London, British Museum Press.
- Arnold, D. 2002 *The Pyramid Complex of Senwosret III at Dahshur: Architectural Studies*. With contributions and an appendix by Adela Oppenheim and contributions by James P. Allen. New York, Metropolitan Museum of Art.
- D'Auria, S., P. Lacovara and C. H. Roehrig 1988 *Mummies and Magic: The Funerary Arts of Ancient Egypt*. Boston, MFA Publications.
- Baba, M. and K. Yazawa 2015 Burial Assemblages of the Late Middle Kingdom Shaft-tombs in Dahshur North. In G. Miniaci and W. Grajetzki (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt (2000-1550 BC): Contributions on Archaeology, Art, Religion, and Written Sources I (Middle Kingdom Studies 1)*, 1-24. London, Golden House Publications.
- Baba, M. and S. Yoshimura 2010 Dahshur North: Intact Middle and New Kingdom Coffins. *Egyptian Archaeology* 37: 9-12.
- Birch, S. 1886 *Egyptian Texts of the Earliest Period from the Coffin of Amamu in the British Museum*. London, Order of the Trustees.
- Borghouts, J. F. 1978 *Ancient Egyptian Magical Texts*. Leiden, Brill.
- Bourriau, J. 1991 Patterns of Change in Burial Customs During the Middle Kingdom. In S. Quirke (ed.), *Middle Kingdom Studies*, 3-20. New Malden, SIA Publishing.
- Brunton, G. 1920 *Lahun I: The Treasure*. London and Aylesbury, Hazell, Watson and Viney, LD.
- Brunton, G. 1927 *Qau and Badari I*. London and Aylesbury, Hazell, Watson and Viney, LD.
- Dubiel, U. 2008 *Amulette, Siegel und Perlen: Studien zur Typologie und Tragesitte im Alten und Mittleren Reich*, *Orbis Biblicus et Orientalis* 229. Göttingen, Academic Press, Vandenhoeck Ruprecht.
- Eaton, E. S. 1941 A Group of Middle Kingdom Jewellery. *Bulletin of the Museum of Fine Arts* 39/236: 94-98.
- Engelbach, R. 1915 *Riqqeh and Memphis VI*. London, British School of Archaeology in Egypt and Egyptian Research Account.
- Engelbach, R. 1923 *Harageh*. London, British School of Archaeology in Egypt and Egyptian Research Account.
- Farah, N. and Z. Iskander 1971 *The Discovery of Neferuptah*. Cairo, General Organization for Government Printing Offices.
- Feucht, E. 1967 *Die Königlichen Pektoreale: Motive, Sinngehalt und Zweck*. Bamberg, K. Urlaub.
- Firth, C. M. and B. Gunn 1926 *Teti Pyramid Cemeteries*. Cairo, Imprimerie de l'Institut Français.
- Frankfort, H. 1930 The Cemeteries of Abydos: Work of the Season 1925-26. *Journal of Egyptian Archaeology* 16: 213-19.
- Garstang, J. 1901 *El-Arâbah: A Cemetery of the Middle Kingdom; Survey of the Old Kingdom Temenos; Graffiti from the Temple of Sety*. London, Bernard Quaritch 15, Piccadilly, W.
- Garstang, J. 1907 *Burial Customs of Ancient Egypt: As Illustrated by Tombs of the Middle Kingdom, A Report of Excavations made in the Necropolis of Beni Hassan during 1902-3-4*. London, Constable & co.
- Golani, A. 2014 Cowrie Shells and Their Imitations as Ornamental Amulets in Egypt and the Near East. *Polish Archaeology in the Mediterranean* 23/2: 71-94.
- Grajetzki, W. 2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Hartwig, M. K. 2015 Sculpture. In M. K. Hartwig (ed.), *A Companion to Ancient Egyptian Art*, 191-218. West Sussex, Wiley-Blackwell.
- Hayes, W. C. 1953 *The Scepter of Egypt I: From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*. New York, Plantin Press.
- Janssen, R. M. and J. J. Janssen 1992 A Cylindrical Amulet Case: Recent Investigations. In J. Gamer-Wallert and W. Helck (eds.), *Gegengabe: Festschrift für Emma Brunner-Traut*, 157-165. Tübingen, Attempto Verlag Tübingen.
- Jéquier, G. 1921 *Les Frises d'Objets des Sarcophages du Moyen Empire*. Cairo, Mémoires publiés par l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Jéquier, G. 1933 *Les Pyramides des reines Neit et Apouit*. Cairo, Imprimerie de l'Institut Français.
- Jørgensen, M. 1996 *Catalogue Egypt I (3000-1550 B.C.)*, Ny Carlsberg Glyptotek. Copenhagen, Ny Carlsberg Glyptotek.
- Kamal, A. B. 1901 Report sur les Fouilles Executées à Déie-el-Bershé. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 2: 206-222.
- Kemp, B. and R. Merrilees 1980 *Minoan Pottery in Second Millennium Egypt*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Lacau, P. 1903 *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire nos. 28001-28078: Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire*. Cairo, Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Lacau, P. 1904 *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire nos. 28079-28086: Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire*. Cairo, Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Lacau, P. 1906 *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire nos. 28087-28126: Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire II*. Cairo, Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Lilyquist, C. 1993 Granulation and Glass: Chronological and Stylistic Investigations at Selected Sites, ca. 2500-1400 B.C.E.. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 290/291: 29-94.
- Mace, A. C. and H. E. Winlock 1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*. New York, Metropolitan Museum of Art.
- Markowitz, Y. J. and P. Lacovara 2009 Egypt and the Aigina Treasure. In J. L. Fitton (ed.), *The Aigina Treasure: Aegean Bronze Age Jewellery and a Mystery Revisited*, 59-60. London, The British Museum Press.

- Melandri, I. 2012 A New Reconstruction of the Anklets of Princess Khnumit. *Vicino Oriente* 16: 41-53.
- de Morgan, J. 1895 *Fouilles a Dahchour, Mars-Juin 1894*. Vienna, Adolphe Holzhausen.
- de Morgan, J. 1903 *Fouilles a Dahchour 1895*. Vienna, Adolphe Holzhausen.
- Morris, E. F. 2011 Paddle Dolls and Performance. *Journal of the American Research Center in Egypt* 47: 71-103.
- Op de Beeck, A. 2005 *A Functional Analysis of Egyptian Burial Equipment from the Late Old Kingdom until the End of the Middle Kingdom* (doctoral thesis, Leuven).
- Oppenheim, A. 1996 The Jewelry of Queen Weret. *Egyptian Archaeology* 9: 26.
- Patch, D. C. 1995 A "Lower Egyptian" Costume: Its Origin, Development, and Meaning. *Journal of the American Research Center in Egypt* 32: 93-116.
- Peet, T. E. 1914 *Cemeteries of Abydos Part II*. 1911-1912. London, William Clowes and sons.
- Peet, T. E. and W.L.S. Loat, 1913 *Cemeteries of Abydos Part III*. 1912-1913. London, William Clowes and sons.
- Petrie, W. M. F. 1901 *Diopolis Parva: The Cemeteries of Abadiyeh and Hu, 1898-9*. London, Oilbert and Rivington, LTD.
- Petrie, W. M. F. 1914 *Amulets*. London, Aris & Phillips and Joel L. Malter.
- Petrie, W. M. F. 1930 *Antaeopolis: The Tombs of Qau*. London, Adolf Holzhausen's Successors Vienna.
- Podvin, J. L. 2000 Position du Mobilier Funéraire dans les Tombes Égyptiennes Privées. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 56: 277-334.
- Robins, G. 1993 *Women in Ancient Egypt*. Cambridge MA, Harvard University Press.
- Robins, G. 2015 Gender and Sexuality. In M. K. Hartwig (ed.), *A Companion to Ancient Egyptian Art*, 120-140. West Sussex, Wiley-Blackwell.
- Roehrig, C. 2003 The Middle Kingdom Tomb of Wah at Thebes. In N. Strudwick and J. H. Taylor (eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, 11-13. London, British Museum Publications.
- Tooley, A. M. J. 1989 *Middle Kingdom Burial Customs: A Study of Wooden Models and Related Material Volume I*, Doctoral Dissertation, University of Liverpool.
- Willems, H. 1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*. Leiden, Ex Oriente Lux.
- Willems, H. 1996 *The Coffin of Heqata (Cairo JdE 36418): A Case Study of Egyptian Funerary Culture of the Early Middle Kingdom*. Leuven, Peeters Publishers & Department of Oriental Studies.
- Willems, H. 1997 The Embalmer Embalmed: Remarks on the Meaning of the Decoration of Some Middle Kingdom Coffins. In J. van Dijk (ed.), *Essays on Ancient Egypt in Honour of Herman Te Verde*, 343-372. Groningen, STYX Publications.
- Willems, H. 2014 *Historical and Archaeological Aspects of Egyptian Funerary Culture: Religious Ideas and Ritual Practice in Middle Kingdom Elite Cemeteries*. Leiden/Boston, Brill.
- Wilkinson, A. 1971 *Ancient Egyptian Jewellery*. London, Methuen.
- Winlock, H. E. 1923 The Museum's Excavations at Thebes. *The Metropolitan Museum of Art Bulletin* 18/12, Part 2: 11-39.
- Winlock, H. E. 1934 *The Treasure of El Lahun*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Winlock, H. E. 1975 The Mummy of Wah Unwrapped. *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 33/2: 72-76.
- Xia, N. 2014 *Ancient Egyptian Beads*. London, Springer.
- Yamazaki, S. 2018 Archaeological and Iconographic Analysis of the Use of Funerary Personal Adornments in the Middle Kingdom of Ancient Egypt. *Sociology and Anthropology* 6/4: 433-446.
- 中村耕作 2013『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』株式会社アム・プロモーション。
- 光本 順 2003「第2節 世界像としての古墳被葬者の身体：死者の身体を巡る行為と認知」松本直子・時津裕子・中園 聡（編）『認知考古学とは何か』129-142頁 青木書店。
- 山崎世理愛 2016「図像資料からみたエジプト中王国時代の装身具研究序論」『エジプト学研究』22号 179-203頁。
- 山崎世理愛 2018「エジプト中王国時代・新王国時代におけるベクトラルの副葬にみられる変化：ダハシュール北遺跡出土資料を用いた考察」『エジプト学研究』24号 203-228頁。

山崎 世理愛

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

Seria YAMAZAKI

Graduate School of Letters, Arts and Sciences,

Waseda University

